

# 本当の自然って何だろう？



家下川の堤防を散歩しながら、子どものように、どれだけの「おもしろい」を見つけられるかが、自然と関わるための第一歩です。

2050年を目標に、市民が生きものとのつながりの中でどう暮らしていくか、また、何をしたら良いかなど、「身近な自然を見直し、守り伝えていくため」の指針が、豊田市から打ち出された。

4年前のCOP10以降、豊田市内でもプールのように「自然を守る活動」が活発化した。しかし、これまで市としての具体的な指

## 地域でくらす生きものの声なき声に耳を傾けて

針はなく、自然に対する方向性や考え方は様々。そのため知らず知らず生態系に悪影響を与えている活動もあった。

今回、豊田市環境部環境政策課から、生物多様性に関わる行動目標が明確に示されたことで、間違った魚や昆虫の放流、植物の移植活動などが見直され、地域の自然保全活動が軌道修正されることを期待したい。

自然は本来、人が守ったり、人が増やしたりするものではなく、自然というルールの中で育まれるもの。雑草はいらぬが、きれいな花だけはたくさん欲しい。

針はなく、自然に対する方向性や考え方は様々。そのため知らず知らず生態系に悪影響を与えている活動もあった。

今回、豊田市環境部環境政策課から、生物多様性に関わる行動目標が明確に示されたことで、間違った魚や昆虫の放流、植物の移植活動などが見直され、地域の自然保全活動が軌道修正されることを期待したい。

自然は本来、人が守ったり、人が増やしたりするものではなく、自然というルールの中で育まれるもの。雑草はいらぬが、きれいな花だけはたくさん欲しい。

「豊かな自然に恵まれたまち」とよたをいつまでも」

人と生きものとの関係を考へて行動するためのガイドブック「豊かな自然に恵まれたまち」とよたをいつまでも」が市から発行されました。

豊田市には、家下川を支流とする矢作川や猿投山をはじめとする山々など豊かな自然があり、私たちの暮らしや産業を支えています。清浄な空気や安心な水は、すべて自然の恵み。これらは、多くの生きものとの繋がりによってもたらされます。このつながりを「生物多様性」と言います。

このガイドブックには、私たちが自然に対してすぐに行うことができ、また、そのポイントが分かりやすくかかれています。

水辺の関係では、逢妻女川の「アカミミガメの防除」が紹介されています。これは、ペットとして飼われていたミドリガメが川や池に捨てられて増えてしまい、元々いたこの地域のカメを追いやっていくことを懸念して始まった活動です。

野生の生きものは「持ち込まない、持ち出さない」が原則です。ホタルは、同じ日本国内でも地域ごとに遺伝的な違いがあることが知られており、地域外から人が持ち込み繁殖させることは、必ずしも良いことはいえません。

地域でさまざまな活動を行うとき、生きものものの視点でも考えてみるのが大切です。

【酒井育】



自然に関わる活動をする人々には、ぜひとも目を通してもらいたいガイドブックだ。



NO.06  
2014. 3月発行  
発行・問い合わせ  
家下川リバーキーパーズ  
Yashitagawa.rk@gmail.com

目次

- ② みんな、知っているかな？ 家下川周辺の生きもの！
- ③ ぼんつく博物館 ザリガニつり
- ④ 家下川のカメたち 調査隊・越冬場所を探せ！

家下川新聞は  
広告を募集しています  
yashitagawa.rk@gmail.com

# みんな、知っているかな？ 家下川周辺の生きもの！

昔は良かったと嘆くより、まずはちゃんと身のまわりの自然を見てみませんか。私たちが気づいていないだけで、まだまだたくさん生きものが家下川には棲んでいます。



アブラナ。菜の花というのは総称で、ダイコンの花も、ハクサイの花も菜の花と呼ぶ。

## 狐

いろいろな生きものがいるから、家下川は面白い



【阿部夏丸】

家下川に春がやってきました。厳しい冬を乗り越えて生きものが活動を始める春から夏は、珍しい生きものに出会えるチャンスです。例えば、家下川に生息する魚の多くがこの時期に小川で産卵を行います。派手に水しぶきをあげて産卵するコイから、ひっそりと

水草に産卵するメダカまで、次の世代へのバトンは春に渡されます。また、毎年海から遡上するアユも、家下川までやってきます。そして、そんな小魚を狙ってサギやカワセミといった鳥類が現れるほか、イタチやヌートリアといった動物も姿を現します。

日差しが暖かい日には、イシガメが日向ぼっこをし、この時期にはスッポンも大胆に姿を見せてくれます。春は生きものの目覚めの季節。あなたも春の家下川を散歩しながら、ここに住む生きものを探してみませんか。

【酒井博嗣】

## 鼬



見た目はかわいいイタチだが、意外と勇猛で、キジやニワトリを襲うこともある。

コイの産卵は行福寺の裏で撮影しました。この季節、上流から下流までどこでも見ることが出来ます。

ナマズの産卵は、夜、懐中電灯を持って観察します。メスにオスが絡みつく瞬間は、何度見てもドキドキです。場所は田んぼの脇の浅い水路。本当は田んぼに入りたいたのですが、上れないので水路で産みます。

土手を散歩すれば、水際で甲羅干しをするカメを見ることが出来ます。一番先

にポチャンと水に飛び込むのはスッポン。彼らは警戒心がとても強いようです。イタチは身軽です。驚くことに、家下川の切り立ったコンクリートの壁を自由自在に走ります。

キツネには何度も出会いました。写真のキツネは柳川瀬公園の近く、足跡は家の前(宗定)で撮りました。足跡を追跡すると、中切から川田を抜け、柳川瀬公園の横から矢作川へ。菓は河川敷にあるようです。

## 鯉



水草に産卵するコイ。1匹のメスに数匹のオスが群がり、水しぶきを上げて産卵する。普通、水草に卵を付着させるが、ビニール袋に産むことも多い。

## 亀



ナマズの幼魚。オタマジャクシのようだが、長いヒゲが6本ある。成長すると4本に減る。

イシガメは陸で産卵する。川岸がコンクリートの壁では上れないので、産卵はできない。

家下川はスッポンの多い川。昼は砂に潜り、夜になると歩き回ってザリガニやタニシ、死魚などを食べる。



## 外来



アライグマは大人になると人には一切懐かない。捨てられたペットが増え続けている。手先が器用で、農作物を荒らす。



ヌートリア。なかなかのグルメで、家下川に生えるマコモを切り取り、美味しい新芽だけを器用に食べていた。

人が何をすべきかは、  
ここに棲む生きものが教えてくれる

# 田

農業が減ったことで  
小さな生きものが戻ってきた

夏、子どもたちと魚とり  
をすると、ハグロトンボを  
見かけます。こうした川ト  
ンボのいる川は貴重です。  
猛暑の日、草陰で休むトン  
ボの群れを見ました。草の  
ない川では、多くの生きも  
のが姿を消してしまいます。



ハグロトンボ。胸が緑色  
の光沢を持つのがオスだ。

# 虫



貴重なヒメタイコウチ。  
西尾市では天然記念物に  
指定されている。

ヒメタイコウチは貴重な  
絶滅危惧種です。小さな集  
団を見つけたましたが、環境  
美化活動でアシをすべて抜  
き取ったため、姿を消して  
しまいました。  
家下川にはいろんな鳥も  
やってきました。TVで人気  
のカルガモの親子もいれば、  
じっと魚を狙うサギの仲間。  
きれいなキジやカワセミも  
よく見かけます。



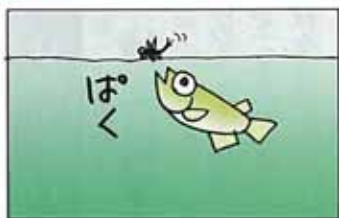
カワセミ。一見エサを奪い合っ  
ているように見えるが、オスがメスに小  
魚をプレゼントして気を引いている  
ところ。人間同様、けなげである。



今、田んぼで鳴くのはアマガエル  
ばかり。トノサマガエルの鳴き声や、  
大きな卵塊がなつかしい。

「これ、なんですか？」  
と、毎年たずねられるのが  
このホウネンエビとカブト  
エビです。5月末から1カ  
月ほどの間、水田で見るこ  
とができます。卵は乾燥に  
強く、干上がっても、翌年、  
田んぼに水が張られると、  
また孵化します。乾燥状態  
なら植物の種のように10  
年ほっておいても平気で、  
水をかければ孵化するのだ  
から不思議です。  
このように、農業が減っ  
たことで復活した生きもの  
がいる反面、エサとなる虫  
が減り、はい上がれない水  
路が出来たことで、トノサ  
マガエルのように絶滅に向  
かう生き物もいます。

# ぽんつ君



こんな風に多種多様な生  
きものがすむ家下川や、そ  
の流域は本当にいい場所で  
す。みなさんも散歩しなが  
ら小さな自然に足を止めて  
みてください。



カブトエビ。ノープリウ  
ス眼(三つ目)を持つため、  
生きた化石と呼ばれる。



ホウネンエビ。田キン  
ギョとも呼ばれ、緑色の  
体色と赤い尾が美しい。

# ぽんつく博物館

## ザリガニつり

昭和40年代、私が子ど  
もの頃のザリガニ釣りのエ  
サはザリガニの身だった。  
それ以前の先輩方といえ  
ば、カエルの皮を剥いてエ  
サにしたという。  
で、現在はいえ、主  
流はチクワカスルメ。どれ  
が良いわけでも、どれが正  
しいわけでもなく、  
所詮、子どもの遊び、  
要は楽に手に入るも  
のがエサなのである。  
ザリガニの釣り方  
は、糸につけたエサ  
をザリガニの前に垂  
らすだけ。ザリガニがエサ  
を抱いたら、そっと持ち上  
げる見釣りだ。  
人気があるのは真つ赤で  
ハサミの大きなザリガニ。  
これは、昔も今も同じ。ち  
なみに、小さくて茶色い  
のはアメリカザリガニの子  
ニホンザリガニではないの  
でお間違えなく。

【阿部夏丸】



Check!

## 外来生物

## ミシシッピーアカミミガメ



北米原産で、通称はミドリガメ。ペットとして人気がありますが、成長すると大きくなり、気も荒くなるため、川や池に捨ててしまう人が後を絶ちません。在来のカメ類や水生植物に悪影響を与えることがわかっており全国的な問題となっています。種類に関わらず、飼育する限りは最後まで面倒を見ることが飼い主の最低限の責任です。【酒井博嗣】



## イシガメ

甲羅と頭が黄金色で、クサガメと比べ頭と脚がほっそりとしています。黒く大きな目が愛らしく、流れのある川を好む傾向にあります。



## クサガメ

威嚇時に臭い匂いを出すことが名前の由来。くさいからクサガメです。家下川にはもともといませんでしたが、ペットが捨てられ増えています。



## スッポン

甲羅の表面が軟らかいのが特徴です。「雷が鳴っても離さない」といいますが、噛まれた時は水に浸けてやると、安心して離すようです。

## 家下川の生きもの図鑑

## 家下川の

こんなの、いました!

家下川には、いろいろな魚がいるんだよ

カメ3種写真提供/矢部隆

家下川  
リバーキーパーズの

本気で調査隊!

## 越冬場を探せ!

暖かい季節になりましたが、前号の続きで、冬の話を書きます。冬の川は生き物の気配が、ぐっと薄くなります。しかし、それでも調査は必要です。生き物が「少ない」「いない」といったことを知ることも重要だからです。

雪の中、寒さをこらえて家下川に入ってみました。捕れる魚は、スゴモロコの仲間にとウカイコガタスジシマドジョウ、カマツカなど。夏に比べると、個体数がとても少ないように思えます。また、いつもいるオイカワやナマズなどは、いくら探しても見つかりません。いったいどこにいたのでしょうか?



越冬中の魚。石の隙間に入り込み、寒さをしのいでいます。このときの水温は5℃。凍りそうな寒さです。



真冬にこんな岩の奥(左)を覗いてみました。すると魚が集まっています(右)。どうやら、川底に湧水があり、他より温かいみたいです。魚はこうやって、冬を越します。

他の河川の話になってしまいましたが、多くの魚が大きな淵(深い所)や工場排水等の温水(温水と言っても17℃ほど)に集まっているのを見ることがあります。おそらく、家下川でも同じでしょう。真偽を確かめるために、家下川の堤防を魚を探しながら歩いてみました。予想の中です。川がカー

ブした場所や、排水が流れ込んでできた深みに、多くの魚が群れています。魚は寒さで命を落とすこともありま。彼らは、少しでも水温の高い深い場所を探し、ここにたどり着いたのでしょうか。家下川を散歩しながら、季節によって異なる魚の様子を見てください。今は春。陽の当たる浅瀬にコイやメダカの群れを見ることが出来るでしょう。【今泉久祥】



爬虫類のカメは、寒いと体が動きません。スッポンは砂に潜り、イシガメは、じっと動かさずに春が訪れるのを待ちます。